

ボロブドゥールの浮彫

賈 鍾 壽

はじめに

世界最大仏教遺跡ボロブドゥールはインドネシア・中部ジャワのジャワトゥンガ州マグラン郡のボロ村にある。8世紀の中頃から9世紀の中頃までのシャイレンドラ王朝が建てたボロブドゥールは6段の階段ピラミッド、3段の円壇、頂上の尖塔から構成されている。ボロブドゥールの各段の上には504体に達する等身大の石仏座像が安置されている。また、旧基



図1 世界最大仏教遺跡ボロブドゥール（東から）

壇、第1段から第4段の回廊の主壁と欄楯に1460面の美しい浮彫が刻まれている。ボロブドゥールが世界的な仏教遺跡と知られているのは、その規模の壮大さはもちろんであるが、仏像と浮彫の高い芸術性にある。

ボロブドゥールは今までに世界各国の多くの研究者によって調査と研究が行われてきた。ボロブドゥールの研究はヨーロッパ研究者によって19世紀から始まるが、研究史の一軸を形成するのが日本人の研究者である。1942年～1945年のジャワ島を植民地支配した縁で日本人の研究が始まる。1942年にケドゥ州の文教政務官であった古沢安二郎が旧基壇を発掘している。その後にも、建築史の千原大五郎^{〔註1〕}、仏教史の干潟竜祥^{〔註2〕}、岩本裕^{〔註3〕}、並河亮^{〔註4〕}、美術史の伊藤照司^{〔註5〕}と肥塚隆^{〔註6〕}など

の研究がある。特に文化史学の小川光暘^(注7)と考古学の坂井隆^(注8)はインドネシア考古研究者スクモノーの研究を受け継いで、ボロブドゥールと先史時代の積み石基壇遺構との関連説を体系的に主張する。筆者も1992年にインドネシア先史時代のピラミッド神殿遺跡を現地調査し、ボロブドゥールとの関連説を論じたことがある^(注9)。



図2 ボロブドゥール（北西）

しかしボロブドゥール浮彫の1460面の中にはまだ經典の出处が分からない342面がある。さらに經典との比定が終わった浮彫にも研究者によって解釈が異なる場面が少なくない。ボロブドゥールの研究はヨーロッパと日本の研究者によって仏教史、美術史方面から主に研究された。しかしボロブドゥールとは何か、なぜケドゥ盆地に建てられたのか、正確に知らせる研究は見当たらない。またボロブドゥールは「寺院説」、「仏塔説」、「立体曼荼羅説」、「宇宙の具象画説」、「靈墓説」など多くの仮説が提示されている。

ボロブドゥール建立者は8～9世紀にジャワ島を支配していた大乘仏教徒シャイレンドラ王朝であったという点、以外には定説がない。本稿はボロブドゥールの浮彫を中心に取り上げ、従来の研究を踏まえながら遺跡の性格や建立の経済的な基盤などを考察する。本稿を書くにあたって筆者が重視してきたのはインド文化の流入とジャワの土着文化が互いに縛られているという点である。この二つの要素がまるで横糸と縦糸とに縛られて、ジャワ民族形式の流れ（時代形式の変遷）を動かして来たという点を明らかにする。

1. ボロブドゥールの浮彫

ボロブドゥールの浮彫は仏教文化圏の中で一番きらめき輝いて美しい仏教美術の精粹である。ボロブドゥールの旧基壇、第1段、第2段、第3段、第4段回廊に総計1460面に達する仏教説話の浮彫がある。ボロブドゥール浮彫は単純な装飾と仏教經典の内容の彫刻と分けることができる。安山岩の粗い表面に深く刻んだ高浮彫が特徴である。幅が長い平方の中に立体に近く浮彫が連続的に刻まれている。彫刻の作業は下層から石材の積み上げ工事が進行することによって完成した石壁の平方の中に彫刻家の一つずつ浮彫を施した。従って、完成した壁面に刻む浮彫の作業は失敗が許されないことから最高の彫刻家を動員したはずである。このような浮彫の制作過程は旧基壇の未完成の浮彫からも分かる。

ボロブドゥールの1460面浮彫は第1回廊欄楯の外壁と各回廊主壁上段の装飾浮彫を含まない。第1回廊欄楯の外壁にも浮彫が刻まれている。これらの浮彫は特別な經典内容を刻んだものではなく、帝釈天の座像を中心にその左右にすべて多羅菩薩立像、帝釈天と天女の浮彫を連続で刻んでいる。主壁上段の上にも菩薩像、花瓶、カーテン、柱の装飾などが連続で刻まれている。また一定の間隔にマカラと装飾配水管があり、四方の各拱門にはカーラとマカラの装飾がある。

ボロブドゥールの装飾浮彫は極めて多種多様である。このような装飾浮彫は第1回廊～第4回廊の欄楯と主壁に刻まれている。旧基壇～第4回廊



図3 第1回廊欄楯の外壁浮彫

の主壁と欄楯の壁面（平方：パネル）には仏教説話が彫刻されている。各回廊の欄楯と主壁、龕室、階段などには装飾浮彫が刻まれている。これらの装飾浮彫は花瓶、香炉、蓮華、菩薩、男女の天人、羅刹、倭人などがある。その他

にも花、木、唐草紋、渦文様、螺旋紋などの連続文様が多く採用されている。

旧基壇、第1回廊～第4回廊の主壁と欄楯の仏教説話浮彫の中に装飾浮彫がある。このような装飾浮彫は主題と関係があっても、なくても壁面の空いた空間を埋め尽くすために刻んだものである。平方のキンナリ・キンナラ、ガルダ、ナガ、獅子などジャワ美術特有の宗教的動物図がある。猿、牛、野兎、鹿、豚、亀、魚、虎、象、雁、鵬、蛇、貝など各種の動物の装飾文様もある。

ボロブドゥールにはカルパタルという天界を象徴する天界樹（天国の木）の浮彫がある。菩提樹を神聖な木として崇拜する思想はインドにもあるが、カルパタルはボロブドゥール、チャンディ・ムンドゥ、チャンディ・ロロ・ジョングランなどのジャワ寺院で重要な装飾として使われている。カルパタルはジャワ固有の「楽園の木」に対する信仰から由来する。楽園の木は影人形劇のワヤンでは山を意味する「グヌグガン」を表す。山はジャワ人の祖先崇拜と関わる土着信仰の重要な要素で、聖なる木とともに重要視された。楽園の木はいつも涼しい休息地と果物を提供してくれる木に取り囲まれて生活して来たジャワ人の暮らしと密接な関係がある^{〔注10〕}。中部ジャワでカルパタルが装飾的に重要なことはこの木の下に宝石や財宝を入れる甕があるからである。財福の神グベラにも同じ甕が表現されている。財宝が入った壺を抱いている満腹な姿のグベラ像は仏教で言う大福天である。このようなカルパタルの装飾とグベラ（大福天）信仰で見られるようにシャ



図4 楽園の木とキンナリ・キンナラ

イレーンドラ王朝は仏教の力を借りて世俗的な富の蓄積に努力を費やしていたと思われる。

東の正面から時計回りに回廊の中に立ち入ると左右に壁面がある。前方に向いて右側が主壁、左側が欄楯である。

仏教經典を刻んだ各回廊の浮彫は基本的に東の中央階段から南、西、北の時計回りに話が展開して行く。即ち、ボロボドゥールの浮彫は東面中央の階段南側から始まり、右側に一周して見るように配置されている。また浮彫の家屋、人物、背景なども右側から左に展開する。第2回廊～第3回廊の善財童子が、善知識の右側にあれば到着した場面、左側にあれば去る場面であると解釈することができる。一方欄楯では、その反対に左側から右側に話が展開する。

表1 浮彫の出典

旧基壇…『分別善悪応報経』(MahaKarmavibanga) (『立世阿毘曇論』)

天界と地獄…160面

第1回廊

主壁上段…『方广大莊嚴経』(Lalitavistara) 120面

主壁下段…ジャータカ (Jataka、『本生譚』)

『ディブヤーヴァダーナ』(Divyavadana、略語 Div.)

『アヴァダーナサタカ』(Avadanasataka、訳語 Avds.)

『アヴァダーナカルバラタ』(AvadanaKalpalata、略語 Avak.) 120面

欄楯上段…ジャータカ (Jataka)

『ジャータカママラ』(Jatakamala、略語 Jm.)

『アヴァダーナサタカ』(Avadanasataka)

『アヴァダーナカルバラタ』(AvadanaKalpalata)

『雑報蔵経』、『法句譬喩経』(Avadanas) 372面

欄楯下段…ジャータカ (Jataka)

『アヴァダーナサタカ』(Avadanasataka)

『ジャータカマラ』(Jatakamala) 128面

第2回廊

主壁…『ガンダ・ヴェーハ』(『華嚴経入法界品』、『ガンダ・ヴェーハ』、略語 Gv.) 128面

欄楯…『ガンダ・ヴューハ』（『華嚴経入法界品』）

ジャータカ（Jataka）とアヴァダーナ説話…100面

第3回廊

主壁…『ガンダ・ヴューハ』（『華嚴経入法界品』）88面

欄楯…『ガンダ・ヴューハ』（『華嚴経入法界品』）88面

第4回廊

主壁…『普賢行願讃』（Bhadracariparanidhana）84面

欄楯…『ガンダ・ヴューハ』（『華嚴経入法界品』）72面

第2回廊

欄楯…ジャータカとアヴァダーナ説話（全体の補充説？＝干潟龍祥）

総計1460面

ボロブドゥールの浮彫はインドの仏教説話を主題にしていることは明確である。しかしその浮彫を刻んだ人はジャワ人であり、浮彫自体がジャワ島の土着文化を文化的背景にする点を忘れてはいけない。仏像と登場人物、主題などがインド的なものであることは否定できない。しかし本生譚に刻まれたアウトリダー・カヌー（横木がある船）はオストロネシア語族の固有のものである。また人々の日常生活、寺院や高床式建築もジャワ的な表現である。



図5 遠洋航海用のアウトリダー・カヌー（I. A. b. 108）

中部ジャワの彫刻はインドのグプタ美術のサールナート派の影響を受けているが、ボロブドゥールの仏像と浮彫にはインドでは見られないジャワ

固有の伝統文化を容易に感じ取ることができる。また、浮彫の仏像、人物像においてもインドの彫刻では見られない柔らかさと温みを内在している。幅が長い平方を使って画面一杯に人物像、樹木、楼閣、民家、動物などを刻んだ絵画的構成法はインドのサーンチー大塔の浮彫を超えた傑作である。アンコール遺跡の浮彫はヒンドゥー教美術独特の激情的・幻想的なものであるが、ボロブドゥールの浮彫には品位ある淑やかな美しさがある。

浮彫にはジャワの民俗・風習を刻んだ場面が多く、このような風習は今もジャワ島で見られる。例えば第1回廊主壁上段の浮彫 I. A. a. 84の料理場面、第1回廊主壁下段の浮彫 I. A. b. 41の稲を収穫して行く場面、第1回廊欄楯上段の浮彫 I. B. a. 336の2匹の牛が鋤を引いて田を

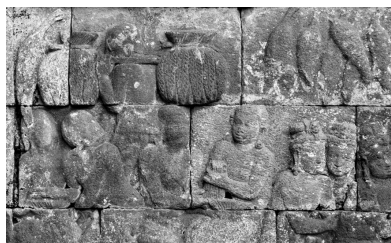


図6 稲を収穫して行く場面 (I. A. b. 41)



図7 水田を耕す光景 (I. B. a. 336)



図8 土器の製作 (I. B. b. 107 a・b)

耕作する農夫、第1回廊欄楯下段の浮彫 (I. B. b. 107 a・b) の土器の製作と運搬の光景、第四回廊主壁の浮彫 IV. A. 46の小川にかけた竹の橋などは今でもジャワでよく見られる風景である。

かかることからボロブドゥール浮彫を通じて当時の王族や民衆がどのような生活をしていたのかを知ることができる。浮彫には楽器、舞踊、武器、炊事道具、衣装などが刻まれている。このようにボロブドゥールの浮彫の中にはジャワ土着文化の要素が数多くある。ボロブドゥールがただインドの影響の産物に過ぎないもので

はなく、ジャワ人が造った民族芸術であることを端的に証明している。

しかしボロブドゥール浮彫の一番重要な彫刻は仏像である。釈迦の浮彫は他の浮彫より彫刻的に優れて、特に腕前が良い石工によって彫刻したことが分かる。その次に重要な浮彫は寺院（I. A. b. 33）とストゥーパである。多様な形態の寺院、宮殿、家屋は古代ジャワ建築の総合展示場とも言える。これらも仏教經典内容を忠実に描いたものもあるが、ジャワの建築を写實的に表現している。

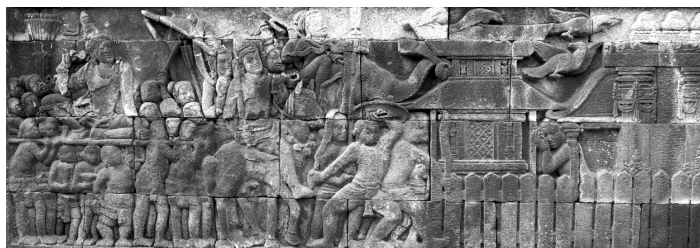


図9 寺院参拝（I. A. b. 33）

ボロブドゥールには多くの仏塔が刻まれている。例えば第1回廊（I. A. b. 80, 83.）～第4回廊の浮彫には円球形に近い仏塔で、これと類似の仏塔は中部ジャワのチャンディプラオサン・キドル、チャンディ・サジワン、チャンディ・バンニユボに残っている。

ボロブドゥールの円壇の小型仏塔もインド仏塔の影響を否定できない。それでもボロブドゥール全体が仏塔だと言う仮説は山で木だけを見て山を論ずるようなことである。ボロブドゥールの1番重要な部分は基壇と四段のピラミッドの回廊である。従って、ボロブドゥールの製作者はインドの仏塔についてもよく知り、ボロブドゥールがインドの仏塔とは明確に違うという点を十分に認識していたと思われる。この点が、筆者がボロブドゥールを仏塔とする見解を否定する根拠である。ボロブドゥールのごく一部にインド仏塔の要素があるということは認められるが、ボロブドゥールそのものを仏塔と言う仮説を筆者は否定的に考えている。

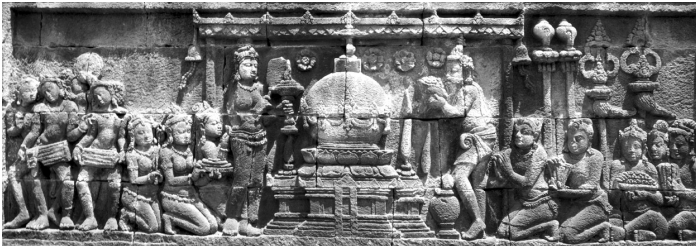


図10 仏塔供養 (I. A. b. 83)



図11 善財童子の仏塔供養 (II. A. 98)

II. 旧基壇の浮彫

旧基壇の浮彫 (O. 1~160面)

一方、現在基壇内部には元々の基壇（旧基壇）がある。旧基壇の東西南北の壁面に160面の浮彫が刻まれている。ボロブドゥール築造は、下部から徐々に上部へ進行するにつれて内部の圧力によって基壇が崩壊する危険が生じた。そのため旧基壇160面の浮彫の製作の途中で中止し、急遽設計を変更し、現在のように二重基壇を積み上げたことが発掘調査で明らかになった。このために旧基壇の壁面浮彫は完全に忘れられるようになる。

現在旧基壇の浮彫は南東隅の5面 (O. 19~23) が公開されている。気泡が多い火山岩の石材は長年の歳月が経った現在も基壇の中に覆い被せていたため風化を免れて彫刻の保存状態がとても良い。浮彫の作風はインドのサールナート派の系統を受け継いだ彫刻もあるが、かなりジャワ化した表現も見られる。このような作風はおそらく彫刻家がまだ、仏像製作には

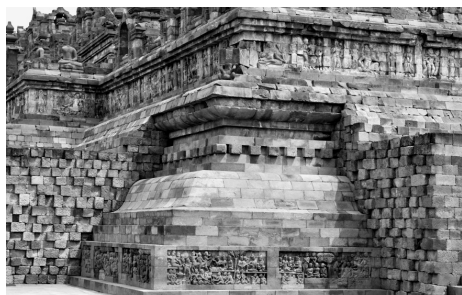


図12 旧基壇の南東隅の浮彫5面（O、19～23）

あまり慣れていなかった初期の作品だからであろう。

旧基壇の浮彫の経験とインドの新しい様式の影響は第1回廊ではるかに発展した様式で現われる。旧基壇の浮彫を統一以前の素朴な新羅石仏だと言え、第1回廊～第3回

廊主壁浮彫は石窟庵の浮彫と言える。しかし第4回廊の浮彫は統一新羅末期の仏像と同じく退化する。もちろん新羅とジャワの歴史は違うが、ボロブドゥール浮彫がシャイレンドラ王朝美術史の大きい流れをそのまま見せてくれる。初期の旧基壇浮彫で第1回廊～第3回廊の完成期にかけて第4回廊では退化期を迎える。第4回廊の浮彫には名場面があまり多くない。おそらく王国の衰退と関わってボロブドゥールの造営に対する熱意が冷めたのであろう。

旧基壇は1885年に考古研究者イゼルマンが見つけた。その後ヴァン・エリプとセパスが調査報告した。1920年代のクルクジアン、ベルネウイルなどの写真家が旧基壇の浮彫を撮影した。エリプとクロムの報告書に鮮やかな旧基壇の160面の浮彫写真を載せている。画家ではエリプの助手マスカールトディーサストローが旧基壇の浮彫を詳しく描いた。1932年にレビーが旧基壇浮彫を調査して『分別善悪報応経』の經典内容を彫刻したものと明らかにした^{〔註11〕}。

160面の浮彫は当時民衆が一番分かりやすい因果応報（『分別善悪報応経』）の内容を描いたものである。しかし160面の浮彫は全部完成されたものではない。119面は完成したが、残り41面は未完成のまま作業が中断された。旧基壇の発掘調査によって重要な文字史料が発見された。未完成の浮彫の上段平方（額縁装飾）にその面に描かなければならない場面の題目がカウイ文字で刻まれていたのである。



図13 因果応報物語（旧基壇 O. 102、 Rijksmuseum）

1460面に達するボロブドゥールの浮彫は刻まなければならない内容を平方（幅200cm、高さ67cm）の上に題目をサンスクリット語で簡単にメモをし、浮彫が完成すると、その後に文字（メモ）を消している。従って、旧基壇の完成した119面にも元々浮彫の主題をメモした文字が書かれていた。119面の浮彫作業は急に中断したと思われるので、平方の上にならば書かれていた文字が残っている。

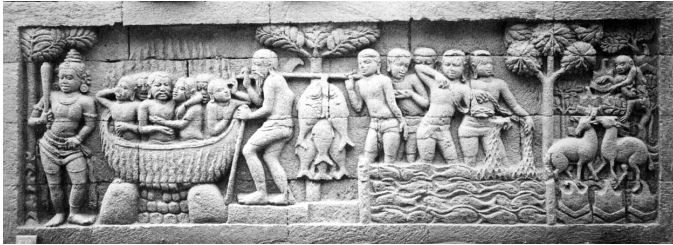


図14 地獄（旧基壇 O. 109、 Rijksmuseum）

この古代ジャワのカウィ文字がボロブドゥール建立年代を知らせてくれる有力な手がかりである。旧基壇に刻まれた文字はインドのパラバー王国で7～8世紀にスマトラ島とジャワ島に伝わり9世紀頃になるとジャワ各地で使われた。しかしボロブドゥールには旧基壇以外には文字が残っていない。旧基壇の浮彫が完成直前に平方の上のメモが消されないうま文字が奇跡的に残った。

旧基壇壁面の浮彫は『分別善悪報応経』を元に彫刻されているが、サンスクリット語の原典の内容は非常に抽象的である。従って、抽象的な仏教

経典を具体的な浮彫で表現することは決して容易な事ではない。例えば経典には地獄の8大監獄とその中にそれぞれ16個の地獄がある。しかし各地獄の詳細な姿は『分別善悪報応経』には具体的な記録がない。

そのため、旧基壇の160面浮彫には経典の出处がわからない部分も多い。個々の浮彫の解釈にも多くの異見がある。しかし人間死後の天上界と地獄を描いた分かりやすい場面もある。特に地獄に落ちる業報の中に無門地獄に落ちる「五業」には『分別善悪報応経』に具体的に記録されている内容を浮彫している。

現世での人間の悪業は「十悪業」があり、このような悪業によって人間は死後地獄へ行くと教えている。一方、160面の浮彫中には人間が行う善業も強調している。言い換えれば布施、聞法、恭敬の光景を多く描いている。この浮彫内容は当時人々の理想的善業行為であった。人はこのような善業（因）によって死後天上界に生まれ変わることができる（果）と言う内容である。最後の部分の35面は天上界の光景を具体的に描いている。

現在公開されている4面半のパネル（O. 19～23）は因果応報の話である。浮彫 O. 21には人の悪口を言う醜い顔を描き、その上部にカウィ文字で「醜い顔」（VIRUPA）という文字が刻まれている。また酒に酔って

乱暴を働く人と病気になった人を看病する人を刻んで飲酒を注意する場面もある。



図15 浮彫 O. 21（「醜い顔」という文字が刻まれている浮彫）

Ⅲ. 第1回廊の浮彫

第1回廊主壁上段 仏伝図（I. A. a. 1~120面）

ボロブドゥールの建立者は8世紀中頃～9世紀中頃に隆盛であったシャイレンドラ王国の歴代の王たちであった。建立に必要な多くの経費は主にこれら歴代の王が施し、ジャワ碑文で見られる多くの建築家スターパーティや、彫刻家スターパーカが造営に参加した。そしてこの偉大な聖殿の建立には途方もない経費と共に多くの仏教信者の宗教的な奉仕活動があったと思われる。奉仕（捨身供養）は犠牲だが、自分を捨てて供養する犠牲精神はボロブドゥールの本生譚の浮彫が説法する一番重要な徳目でもある。従って、ボロブドゥール造営にはシャイレンドラ王朝の財政的な支援だけではなく多くの仏教信者の自発的な奉仕活動が大きい役割を果たしたと思われる。

ボロブドゥールの第1回廊主壁上段には釈迦の生涯話を描いた120面の浮彫が刻まれている。東正面入口の階段を上って第1回廊に至れば右側

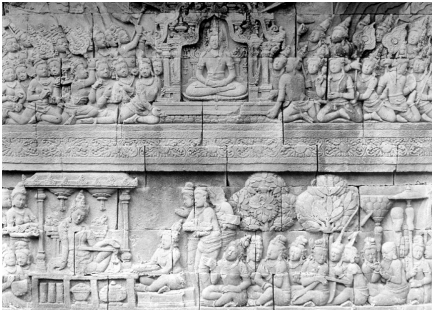


図16 上段：釈迦降臨（仏伝図）、下段：マノハラ物語（ジャータカ）（I. A. a. と b. 12）

の主壁上段と下段に同じ大きさで刻まれた美しい浮彫が目に入って来る。この主壁上段で続く浮彫が釈迦の一代記の仏伝図である。東階段を上って来て第1回廊主壁と欄楯を見て時計回りに左側から右側に巡礼するようになる。

釈迦の一代記の中で誕生、成道、説法、涅槃は重要な場面である。それで誕生仏、成道像、説法像、涅槃像が仏像の基本を成している。第1回廊上段の仏伝図は兜率天にある釈迦の話から始まり、誕生、成道、初転法輪までを詳細に彫刻している。従って、第1回廊上段浮彫が釈迦の生涯を描いた仏伝図と言っても涅槃までの釈迦の一代記の全部を描いたものではない。

120面からなるこの大パノラマの仏伝図はインドや中国でさえ見られないジャワ芸術の精粹である。この仏伝図の浮彫は世界最大の仏教遺跡ボロブドゥールという表現に劣らない位、規模とともに芸術的価値も傑作である。ボロブドゥールの仏伝図は古代インドのサンスクリット語の仏教經典『ラリタヴィスタラ』(Lalitavestra)を忠実に描いている。

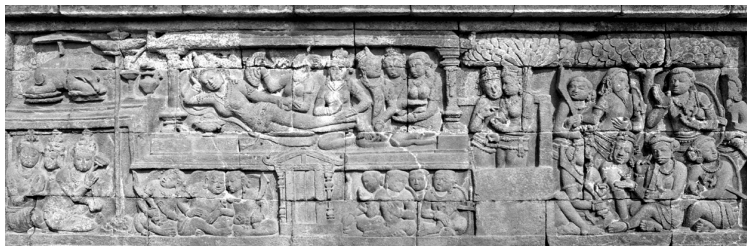


図17 菩薩、白象の形にして母胎に入る (I. A. a. 13)

この經典は中国に伝わって『方廣大莊嚴經』という名前に翻訳される。『方廣大莊嚴經』各品の題目は第1序品、第2兜率天宮品、第3勝族品、第4法門品、第5降生品、第6処胎品、第7誕生品、第8入天祠品、第9宝莊嚴具品、第10示書品、第11觀農務品、第12現芸品、第13音樂発悟品、第14感夢品、第15出家品、第16頻婆娑羅王勸受俗利品、第17苦行品、第18往尼連河品、第19詣菩提場品、第20嚴菩提場品、第21降魔品、第22成正覺品、第23讚歎品、第24商人蒙記品、第25大梵天王勸請品、第26轉法輪品、第27囑累品などの全122冊27品(27枚)で成り立って釈迦の生涯を伝える經典である。翻訳はインドの僧侶デーバカラと中国唐の永淳2年(683)によって行われた。ボロブドゥールの第1回廊の仏伝図はインドの『ラリタヴィスタラ』を根拠にしたが、漢訳の『方廣大莊嚴經』内容とほぼ正確に一致する。

釈迦は悟った人の尊称で紀元前463年頃の中部インド(現在ネパールのタライ地方)のカピラバットで生まれた。父親は定盤王、母親は麻耶夫人である。釈迦は16歳で結婚したが、人間の苦痛に深く煩惱して、妻と子供を捨てて29歳の時に出家する。35歳の時ガンジス川中流ブッダガヤの菩提

樹の下で悟りを得る（正悟）。その後自分の教えをサールナートの聖地鹿野苑で5人の比丘に初めて説法する。



図18 偉大な出発、菩薩の出城（I. A. a. 65）

ボロブドゥールの第1回廊上段の仏伝図120面は釈迦の一生を人々に分かりやすく描いた絵本にあたる。参拝者に釈迦の一代記の浮彫を通じて釈迦の教えを学習させるために造られた浮彫である。仏教の教主、釈迦の教えを理解するには今生の釈迦の一生を知ることが仏教信者の一番重要な徳目であった。当時ボロブドゥールの設計者が第1回廊主壁の上段に仏伝図を描き、釈迦の生涯を最初に参拝者に知らせようと思ったことは明瞭である。

第1回廊主壁上段・下段の浮彫の各面の高さは83 cm である。しかし各平方の幅は185cm と235cm の二つの種類がある。このように横が長い画面にもかかわらずほとんどの浮彫は一画面に一場面（一図一景）が刻まれている。従って、話の筋書とは関係のない脇役が多く登場する。

第1回廊主壁下段浮彫 釈迦の前生譚（I. A. b. 1~120面）

ボロブドゥール回廊の浮彫の中で彫刻的に一番すぐれている所は第1回廊の主壁である。浮彫内容も分かりやすい場面で、第1回廊主壁の上段は釈迦の一代記を彫刻した仏伝図で、下段は全120面のパネルからなる釈迦の本生譚（ジャータカ）と仏子の前生譚（アヴァダーナ）を主題としている。

しかしボロブドゥールに刻まれた本生譚は上段の仏伝図とは違い出典がわからない場面と浮彫の解釈に異見のある場面が多い。第1回廊主壁上段・

下段浮彫の各面の高さは83cm の一定である。しかし各面の長さは185cm と235cm の二つの種類がある。このように横長い画面（平方）であるが大部分の浮彫は一画面に一場面（一図一景）が刻まれている。従って、話の筋書とは関係のない脇役が多く登場する。クロムが指摘したようにパノラマ画面のように横に長い壁面を満たすために主題と関係ない不必要な人物と背景の描写が多い。また説話の絵画的な表現の限界による省略法と連続性の欠陥によって浮彫の解釈を難しくしている。このようなエキストラの並列的な配置は画面の動的な動きを制約している。それに彫刻家の共同作業によって他の話にも構図が類似する浮彫も少なくない。



図19 宮廷舞踊（マノハラ物語、I. A. b. 19）

第1回廊主壁下段の本生譚は主壁上段の仏伝図とともにボロブドゥールの浮彫の中で一番面白く、魅力的な場面である。仏教では人は生まれる以前に前世があったと言う。釈迦がこの世の中に生まれる前の多くの前世の話が伝わっている。釈迦の前世の話にはある世の中では王子として生まれ、また他の世の中では象や猿などの動物として生まれた。釈迦が前世に象であった時、象は人を手伝って善業を積み、その偉大な善業によって死後、釈迦として誕生するという話である。このような釈迦の多様な前世善業の話を本生譚と言う。

釈迦の前身譚はスリランカや東南アジアに伝わる上部仏教の経典『南伝大蔵経』（全65冊）の中で詳細に記録されている。元々インドの古語パーリ語で記録したこの経典には547種の本生譚が伝わっている。ボロブドゥールの第1回廊主壁下段と欄楯の浮彫も『南伝大蔵経』547種の本生譚に基づいて刻まれたものである。しかしボロブドゥールの彫刻家は経典内容を順に彫刻したのではない。ある話では色々な画面を使って経典の内容を分

かりやすく表現したところもあり、ある話の一つあるいは二つの場面のみを使って描いたところもある。また浮彫の主題がインド経典に出る話だが、実際に彫刻した人はジャワ人である。そのためジャワ人の表現した世界はジャワの風景である。このような過程で『南伝大蔵経』547種の本生譚はジャワ人によって取捨選択され、また直訳ではない意識した部分もある。従って、経典の典拠を明確に比定できない浮彫がある。



図20 シビ王本生譚（I. A. b. 56）

表2 第1回廊主壁下段（I. A. b 1～120面）

I. A. b. 1～20：マノハラ物語

I. A. b. 21～30：〔未比定〕

I. A. b. 31～50：マンダタル王の本生譚（？）

I. A. b. 51～54：雲馬本生譚（Valahassa？）（53～54、伊藤、並河）

I. A. b. 55～56：シビ王本生譚

I. A. b. 57～60：求法太子本生譚

I. A. b. 61～63：サンブラー姫本生譚

I. A. b. 64～88：仙道王物語37、Rudrayana-avd.（根本有部毘奈耶卷）

I. A. b. 89～91：バツラーティヤ王本生譚

I. A. b. 92～105：〔未比定〕

I. A. b. 106～112：4門本生譚（仏本行集経巻50、Ja. 82、Mittavinda）

I. A. b. 113～120：〔未比定〕

第1回廊欄楯上段浮彫（『ジャータカ』と『アヴァダーナ』、I. B. a. 1～372面）

ボロブドゥールの第1回廊欄楯上段と下段にはジャータカとアヴァダーナの話を中心とした浮彫が刻まれている。犠牲の崇高を説く場面が1番多く、忘恩を警戒し、忍辱の崇高を説く悪因悪果の話がある。しかしこれら浮彫の中には経典の出処と内容がわからない平方（パネル）が少なく



図21 第1回廊欄楯上段浮彫

ない。また欄楯下段にもジャータカとアヴァダーナを主題とした浮彫があるがひどく損失しているためその内容もほとんどわからない。



図22 啄木鳥本生譚（I. B. a. 133～135）

表3 第1回廊欄楯上段浮彫

- I. B. a. 1～4 : Jm. 1. 菩薩、投身して餓牝虎を飼う
- I. B. a. 5～9 : Jm. 2. シビ王本生譚
- I. B. a. 10～14 : Jm. 3. 粥供養者
- I. B. a. 15～18 : Jm. 4. 長者本生譚
- I. B. a. 19～22 : Jm. 5. 長者本生譚
- I. B. a. 23～25 : Jm. 6. 兎本生譚
- I. B. a. 26～30 : Jm. 7. Agastya

- I. B. a. 31~34 : Jm. 8. 慈力王本生譚
- I. B. a. 35~39 : Jm. 9. ヱィシュヴァンタラ太子
- I. B. a. 40~43 : Jm. 10. 国王本生譚
- I. B. a. 44~47. a : Jm. 11. 帝釈天
- I. B. a. 47. b. : Jm. 12. 波羅門
- I. B. a. 48~52 : Jm. 13. ウンマヤンティ本生譚
- I. B. a. 53~55 : Jm. Suparaga
- I. B. a. 56~57 : Jm. 15. 魚
- I. B. a. 58 : Jm. 16. 鶉本生譚
- I. B. a. 59~61 : Jm. 17. 瓶
- I. B. a. 62~63 : Jm. 18. 長者本生譚
- I. B. a. 65~68 : Jm. 19. 蓮根
- I. B. a. 69~71 : Jm. 20. 長者
- I. B. a. 72 : [未比定]
- I. B. a. 73~76 : Jm. 21. 小ボディ本生譚 (Bodhi-brahman)
- I. B. a. 77~80 : Jm. 22. 白鳥王本生譚 (Hamsa)
- I. B. a. 81~85 : Jm. 23. 大ボディ本生譚 (Bodhi-brahman)
- I. B. a. 86~89 : Jm. 24. 猿王本生譚 (Mahakapi) (=Ja. 516)
- I. B. a. 90~93 : Jm. 25. 鹿王本生譚 (Sarabha)
- I. B. a. 94~98 : Jm. 26. ルル鹿王本生譚 (Ruru)
- I. B. a. 99~102 : Jm. 27. 猿王本生譚 (Mahakapi) (=Ja. 407)
- I. B. a. 103~107 : Jm. 28. 忍辱仙人 (Ksanti)
- I. B. a. 108~111 : Jm. 29. 梵天 (Brahman)
- I. B. a. 112~115 : Jm. 30. 白象本生譚 (Hastin)
- I. B. a. 116~119 : スタソマ王 (Sutasoma)
- I. B. a. 120~127 : Jm. 32. 鉄の家 (Ayogrga)
- I. B. a. 126~132 : Jm. 33. 水牛本生譚 (Mahisa)
- I. B. a. 133~135 : Jm. 34. 啄木鳥本生譚 (Satapattra)

- I. B. a. 136～138：〔未比定〕
- I. B. a. 139：Ja. 455・母を養う象 (Matiposaka)
- I. B. a. 140～142：〔破損〕
- I. B. a. 143～147：Ja. 479. 司祭大臣 (Kalingabodhi)
- I. B. a. 148～158：Ja. 497. Matahga
- I. B. a. 159～160：Ja. 499. シビ本生譚
- I. B. a. 161～168：〔未比定〕
- I. B. a. 169：Ja. 506. 竜王 (Campeyya)
- I. B. a. 170～174Ja. 415. クンマサピンダ (Kummasapinda)
- I. B. a. 175～178：Avds. 35. スーパ王 (Suupa)
- I. B. a. 179～182：Avds. 32. (口いっばいの水)
- I. B. a. 183～185：Ja. 505. ソマナサ王子 (Somanassa)
- I. B. a. 186：〔破損〕
- I. B. a. 189～191：Avdk. 3. マニクダ (Manicuda)
- I. B. a. 192～195：Avdk. 97. 亀 (Kasyapa『雑宝蔵』33)
- I. B. a. 196～200：Ja. 222. 猿ナンディヤ本生譚 (CullaNandiya)
- I. B. a. 200. r. ～214：Ja. 494. サディナ王本生譚 (Sadhina 王?)
- I. B. a. 215～221：Ja. 526. ナリニカ (Nalinika)
- I. B. a. 222～371：〔未比定〕
- I. B. a. 372：比丘精進力 (Viryabala、『法句譬喩』『僧伽羅刹所集』仙人本生)

IV. 第2回廊主壁浮彫

第2回廊主壁浮彫 (II. A. 1～128面)

ボロブドゥールの第2回廊主壁浮彫は経典『ガンダ・ヴェーハ』に登場する聖者をはじめから最後まで順に正確に描いていない。話が途中で切れたり、話が繰り返されたりする。なぜ、このようになったのかはわからない。善財童子はどんな人であったのだろうか。童子は普通幼い男の子を意

味するが経典では「純真無垢な子供のように仏道を求める若者」（青年の求道僧）の意味である。『華嚴経入法界品』の最初の部分である文殊師利菩薩と出会う過程が次のように記録されている。

この童子が受胎した時、童子の家にあった7個の宝物蔵から七個の宝物楼閣が現われた。そして童子が生まれると部屋に500個の宝物が入った皿が並ぶ奇跡が起きる。童子の父親が古い師であるバラモンに童子を見せると、バラモンは童子の姿を見て、ありがたい人物の誕生と言い、善財と名前をつけた。

『華嚴経入法界品』は善財童子がどのように菩薩行を学ぶために善知識を訪ねて教えを乞うかという内容である。最初に巡礼を勧めた文殊師利菩薩と53人の善知識を訪問し、弥勒菩薩、普賢菩薩を訪問するので善財童子



図23 象に乗って巡礼する善財童子（Ⅱ. A. 54）

が訪問した場所と善知識は総55ヶ所の55人になる。ところが文殊師利菩薩は2回も訪ねて、51番目の徳生童子と52番目の有徳童女は同じ場所で同じ教えを説く。従って、善財童子が訪問した場所と善知識は53ヶ所の54人になる。

巡礼地で出会った聖者は菩薩5人、比丘5人、比丘尼1人、優婆夷（女性の信徒）4人、貿易商や長者が10人、天人1人、女神10人、バラモン2人、仙人1人、王2人、出家外道（仏教以外の修道僧）1人、童子4人、童女3人、船頭1人、大人1人、聖女1人である。この中には神のような存在から普通の男女まで含まれている。善財童子の長い求道の巡礼道は『華嚴経入法界品』ではインド南に向かうことが分かる。散見される地名を見れば南インドを主に巡礼したようである。しかし巡礼の後半にはインド中部を巡礼している。観世音菩薩に会った以後にはインド中部から天界に至る。

第2回廊主壁浮彫が『華嚴經入法界品』を典拠にする善財童子の巡礼記で、第3・第4回廊主壁浮彫も同じ内容だという解釈はクロムによって1920年にオランダ語で初めて発表された。クロムの著書には全浮彫の写真と詳細な解説があり、彼の研究は1927年に英語に翻訳され、ボロブドゥール浮彫の比定研究に多大な影響を及ぼした^(注12)。その後ボスがクロムの比定研究に基づいて1930年に第3、第4回廊の浮彫の主題の解明を試みた。干潟は第2回廊(欄楯を除外)から第4回廊までの浮彫と『華嚴經入法界品』のサンスクリット語原典と漢訳本を対照して詳細な一覧表を発表した^(注13)。1967年フォンテインがクロムとボスの比定研究を受け継ぎながら、干潟説を参照して新しい比定を提示した^(注14)。ボロブドゥールの善財童子の巡礼記の比定はクロム、ボス、フォンテイン、干潟の詳細な浮彫比定にはそれぞれ異なる点もあるが、次の部分はおおよそ一致する。

第2回廊主壁浮彫Ⅱ. A. 1~15は画面中央で結跏趺坐した釈迦を中心に左右に菩薩あるいは衆生を配置しているが、この浮彫が『華嚴經入法界品』の序文にあたる。その後続く浮彫Ⅱ. A. 16は中央の楼閣の中に文殊師利菩薩が座り、その楼閣右側に善財童子が日傘を持って立っている。文殊師利菩薩が善財童子に善知識訪問を勧める場面である。



図24 釈迦を中心に左右に菩薩と衆生(Ⅱ. A. 13)



図25 善財童子が文殊師利菩薩に教を乞う場面(Ⅱ. A. 14)

浮彫Ⅱ. A. 17~72は2番目の善知識徳雲比丘から徳生童子と有徳童女までと解釈するのは干潟とフォンテインが一致する^(注15)。しかし第2回廊浮彫が『華嚴經入法界品』の記録を手順に従って、彫刻したのであれば、その次の浮彫Ⅱ. A. 73は弥勒菩薩を訪問する場面を描かなければならな

い。ところが、浮彫Ⅱ．A．73は善財童子が歩き、雲に乗って飛ぶ天人が刻まれていた。浮彫Ⅱ．A．74～76には釈迦が刻まれ、弥勒菩薩の姿は捜せない。浮彫Ⅱ．A．74～76は『華嚴經入法界品』の序文がまた繰り返して刻まれ、浮彫Ⅱ．A．78は善財童子が釈迦と会う場面である。このような浮彫は現在に伝わる經典にはない内容である。

浮彫Ⅱ．A．47は観世音菩薩を訪問する場面である。浮彫Ⅱ．A．100～102には宝髻の前に化仏が刻まれた観世音菩薩が三面連続して登場する。これらの浮彫は4臂（Ⅱ．A．101）と6臂（Ⅱ．A．102）の差はあるが、



図26 観世音菩薩と善財童子（Ⅱ．A．102）

化仏と左手に蓮華を持っていることを見れば観世音菩薩である。なおかつ台座下に牛（ナンディン）を彫刻し、シヴァ（マハー・デーヴァ）と見える4臂の浮彫Ⅱ．A．48と浮彫Ⅱ．A．104の二つの場面に登場する。

このように浮彫Ⅱ．A．74～76は入法界品序文に対応し、浮彫Ⅱ．A．77以後は弥勒菩薩の直前までの善知識をまた繰り返して彫刻している。しかし2回目の浮彫では省略した善知識も少なくない。このために第2回廊主壁浮彫の比定が非常に困難で、フォンテインと干潟は互いに違う仮説を提示している。ただ浮彫Ⅱ．A．125に男女2人の善知識が刻まれて



図27 徳生童子と有徳童女（Ⅱ．A．125）

いることから徳生童子と有徳童女と比定した点は理論の余地がない。その後続く第2回廊主壁の浮彫Ⅱ．A．126～128は善財童子が弥勒菩薩の大楼阁に到着した場面である。

『華嚴經入法界品』には善財童子が54人の善知識を訪ねることになっているのに、なぜボロブドゥールの浮彫には弥勒までの善知識を2回ずつ訪問する浮彫を刻んだのであろうか。これに関してサンスクリット語原典に善財童子が110人の善知識を訪問した後、弥勒菩薩と会い、110城を訪問した後、文殊師利菩薩を訪問したという記録がある。この110城、110善知識の問題は、すでに唐時代の法蔵がすべての善知識が1人2役を引き受けて、



図28 願勇光明守護衆生夜天善財童子(Ⅱ. A. 59)

55人の倍数である110人と解釈している。このような華嚴教学の解釈でボロブドゥール浮彫が善知識を2回ずつ訪問したのは110という数字を合わせるためであると解釈も可能である。

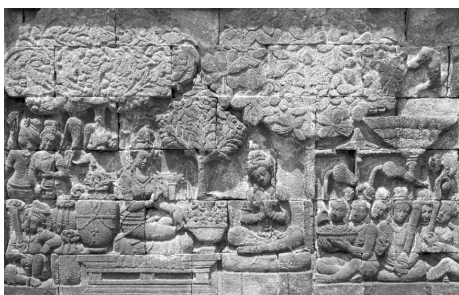


図29 敷樹華夜天と善財童子(Ⅱ. A. 57)

善財童子が多様な善知識を訪ねるが、善知識が室内あるいは室外にあっても画面の中心に配置している。善財童子は善知識を向けて右側の1段低い場所に座っているか、立っている。そして従者らよりちょっと大きく表現されているから善財童子を識別するのはあまり

難しくない。また善知識の訪問場面以外にも徒歩、お御輿、馬車、象に乗って巡礼する善財童子と仲間を刻んだ浮彫がある。

第2回廊主壁浮彫(幅165~168cm、高さ113cm)は『華嚴經入法界品』に根拠して善財童子が弥勒菩薩の弥勒宮の前に到着した場面で終わる。今まで多くの研究者がボロブドゥール浮彫と經典の典拠を究明しようと努力したが、相変わらず主題がわからない画面も少なくなかった。はじめから文

字と浮彫は完全に異なる表現の手段なので『華嚴經入法界品』の經典にだけ即して浮彫を解釈することは限界がある。

このような經典と浮彫の違いは彫刻家（監督者）による場面選択と省略、造形表現の限界、仏教經典の理解不足と教理による制約、説話の見た筋書と関係ない助役や背景の表現で生じたという肥塚隆の見解は注目に値する^(註16)。經典の順序でそのまま画面に一善知識を彫刻するのであれば浮彫の比定は何ら問題にならない。しかしボロブドゥールの第2回廊主壁の善財童子巡礼記は中間に善知識を略したり、同じ善知識を繰り返して彫刻しているので男女の区別以外は外見で善知識を正確に識別することができない。なおかつ善財童子巡礼記とは全く関係がない浮彫もある。おそらく彫刻家が同じ内容を繰り返して同じく彫刻する意思がなかったと思われる。

例えば浮彫Ⅱ. A. 113は右側に禅定印の釈迦が描かれているが、この浮彫がなぜ描かれたのかわからない。このように監督者がある場面を取捨選択したかによって浮彫の図像は大きく変わる。また、造形表現の限界は抽象的な經典の記録を具体的に表現しなければならない問題がある。大乘經典の家屋と人物像は非常に豪華な形を誇張して描いているから、それを写實的に造形化することは容易ではなかったはずである。經典に登場する



図30 禅定印の釈迦図（Ⅱ. A. 113）

人物は皆派手な装飾と立派な身なりで貴い姿を表現している。このような多様な人物像をそれぞれ特徴的にひと目にわかるように彫刻するのは易しくなかったはずである。

經典では法宝周羅長者の邸宅は「無数の摩尼宝石で派手に飾られ、周囲を多くの宝石装飾の木が取り囲んでいる」と記録されている。10段の建物の各層に多くの人が集まっている姿が詳しく書かれている。しかし浮彫には大邸宅と多くの宝石で飾られている木を彫刻しているが、經典とまったく同じ内容の浮彫ではない。

文殊師利菩薩は左手に經典と青い蓮華を持っている姿で表現している。ところが文殊師利菩薩の相容について經典には何ら記録がないので彫刻家は文殊師利菩薩の伝統的な図像に基づいて表現したと思われる。第2回廊主壁四画面に登場する観世音菩薩も伝統的な図像に従って浮彫を行っている。ただ同じ菩薩なのに二臂、四臂、六臂と臂数を異にする変化はある。また「補怛洛迦山頂の西の洞窟に観世音菩薩がいる」という經典内容の記録と一致する浮彫は洞窟の中にある観世音菩薩の浮彫Ⅱ. A. 100だけで、



図31 観世音菩薩と善財童子（Ⅱ. A. 100）

他の三つの画面では楼閣の中に座っている。3人の童子の中にインドリイェーシュヴァラ童子（釈天柱/自在主/根在在）だけ頭後に三日月形の装飾をしているが、これは中部ジャワの他の石像にしばしば見られる。

観世音菩薩の臂数に三種類あるのは変化をはかったと思われる。ボロブドゥールの彫刻家は同じ内容の場面を同じように表現しようとする意図はなかったと言える。例えば自在海師を最初に訪問する場面は大きい船を表現しているが、2回目は船も海も描かれていない。最初の訪問には「都城の大きな門の前の港に船子がある」という經典記録内容に忠実に従ったが、2回目の訪問には船と海の描写がない。彫刻家が同じ内容をまったく同じに表現しなかったのは明白である。また最初の浮彫には自在海師と善財童子に頭光があるが、2番目の浮彫には頭光がない。善知識と善財童子にも頭光のない例が散見される。第1回廊主壁上段浮彫の釈迦に頭光がない例もある。

表4 『華嚴經入法界品』と第2回廊主壁浮彫（議論の余地がある浮彫＝？）

第1回目		第2回目
『華嚴經入法界品』序文	II. A. 1～15	II. A. 73～74
1. 文殊師利菩薩	II. A. 16	
2. 功德雲比丘	II. A. 17	
3. 海雲比丘	II. A. 18	
4. 善住比丘	II. A. 19	
5. 弥伽	II. A. 20	
6. 解脱長者	II. A. 21	
7. 海幢比丘	II. A. 22	
8. 休捨優婆夷	II. A. 23	II. A. 75～81？
9. 毘目多羅仙人	II. A. 24	II. A. 94？
10. 方便命バラモン		II. A. 70？
11. 弥多羅尼童女	II. A. 25	II. A. 82
12. 善現比丘	II. A. 26	
13. 釈天柱童子	II. A. 27	
14. 自在優婆夷	II. A. 28	II. A. 83
15. 甘露頂長者	II. A. 29	
16. 法宝周羅長者	II. A. 30. 31？	
17. 普眼妙香長者	II. A. 33. 34？	
18. 満足王	II. A. 35	
19. 大光王	II. A. 36. 37？	II. A. 84？
20. 不動優婆夷	II. A. 38	II. A. 85
21. 随順一切衆生外道	II. A. 39	II. A. 86
22. 青蓮華香長者	II. A. 40	II. A. 87
23. 自在海師	II. A. 41	II. A. 88
24. 無上勝長者	II. A. 42？	II. A. 89
25. 師子奮迅比丘尼	II. A. 43	II. A. 90

26. 婆藪蜜多女人	II. A. 44	II. A. 91~97
27. 安住長者	II. A. 45. 46	II. A. 98、99
28. 觀世音菩薩	II. A. 47	II. A. 100~102
29. 正趣菩薩		II. A. 103
30. 大天神	II. A. 48	II. A. 104
31. 安住道場地神	II. A. 49	II. A. 105
32. 婆娑婆陀夜天	II. A. 50	II. A. 106
33. 喜目觀察衆生夜天	II. A. 51	II. A. 107
34. 喜目觀察衆生夜神	II. A. 52	II. A. 108
35. 妙徳救護衆生夜天	II. A. 53	II. A. 109
36. 寂澗音夜天	II. A. 55	II. A. 110
37. 妙徳守護諸城夜天	II. A. 56	II. A. 111
38. 敷樹華夜天	II. A. 57	II. A. 112
39. 願勇光明守護衆生夜天	II. A. 59	
40. 妙徳円満林天	II. A. 60. 61?	II. A. 113? II. A. 114?
41. 瞿夷釈迦女	II. A. 62	II. A. 115?
42. 摩耶夫人	II. A. 63.64	II. A. 116
43. 天主光童女	II. A. 65	II. A. 117
44. 遍友童子		II. A. 118
45. 善知衆芸童子		
46. 賢勝優婆夷	II. A. 66	II. A. 119
47. 堅固解脫長者	II. A. 67	II. A. 121
48. 妙月長者	II. A. 68?	II. A. 122
49. 無勝軍長者	II. A. 69	II. A. 123
50. 尸毘最勝バラモン	II. A. 70	II. A. 124
51. 徳生童子	II. A. 72	II. A. 125
52. 有徳童女	II. A. 71	
53. 弥勒菩薩	II. A. 8.	II. A. 40

毘盧遮那大樓閣前		II. A. 126. 127
無量天龍		II. A. 128
善財童子合掌恭敬	II. A. 1	II. A. 41
弥勒如是歎善財 功德	II. A. 2	II. A. 42
善財童子	II. A. 7	
弥勒菩薩…入樓閣中…	II. A. 8	
文殊師利菩薩師利	II. A. 9	
54. 善財童子…詣蘇麻那城	II. A. 10	II. B. 48. 49
文殊師利菩薩…摩善財頂	II. A. 11	
文殊師利菩薩 宣說此法	II. A. 12	II. B. 50~51
還攝神力忽然不現	II. A. 13	
55. 善財童子 普賢菩薩	II. A. 14. 15	II. B. 71
善財菩薩 普賢菩薩	II. A. 18	II. A. 82
一切仏刹 三昧 世界海		II. A. 83~84
汝見我此神通不		II. A. 19
善財童子 觀察		II. A. 20~
普賢菩薩 行願 大慈大悲		II. A. 39

第2回廊欄楯浮彫（II. B. 1~100面）

第2回廊欄楯の浮彫の数は100面である。平方の大きさは幅①190~②85、高さ55cmの二つの種類の大きさがある。しかし現在は20面が破損して、その中の10面が比定されているが、残った浮彫は未比定の状態である。従来の研究では第2回廊欄楯の浮彫は『華嚴経入法界品』、アヴァダーナ、ジャータカの内容を浮彫したものと推定されてきたが、最近善財童子の巡礼記が含まれたことが明確になった。

弥勒菩薩宮殿に到着した善財童子をボロブドゥールの第2回廊主壁に2回も繰り返して刻み、第2回廊欄楯にも再び彫刻されている。3回も繰り返して善財童子の巡礼記を彫刻したのはなぜだろうか。このような謎はボ



図32 マハー・プラバ（大光王）と善財童子（Ⅱ. B. 39）

ロブドゥール浮彫の原本（古代ジャワ語で翻訳したインドの仏教経典）が発見されなかったことから起因する。インドの経典が漢訳に翻訳されたように古代ジャワ語でも翻訳されたと思うのが自然である。このような経典（ロンタル椰子葉に刻んだ経典）はボロブドゥールの浮彫でも実物を確認することができる。

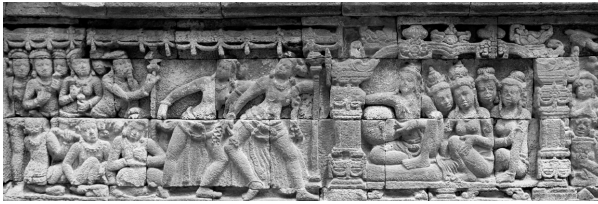


図33 踊る舞姫（Ⅱ. B. 44）

しかしジャワで書かれた仏教経典は発見された事例がない。第2回廊の欄楯浮彫と主壁浮彫は仏教経典の完全な知識なしには彫刻できない。従って、ボロブドゥールの浮彫を典拠とした仏教経典は現在伝わっているイン



図34 仏塔供養（Ⅱ. B. 43）

ドあるいは中国の経典とは異なる内容の経典であった可能性もある。

表5 第2回廊欄楯浮彫

- II. B. 1～6：不明（破損）
- II. B. 7～12：未比定
- II. B. 13a～b：『ガンダ・ヴューハ』. (2) メーガシュリー（功德雲比丘）
- II. B. 14～24：未比定
- II. B. 25：『ガンダ・ヴューハ』. (10) ジャヨーシュマーヤタナ（方便命バラモン）
- II. B. 26：『ガンダ・ヴューハ』. (11) マイトラーヤニー（弥多羅尼童女）？
- II. B. 27：『ガンダ・ヴューハ』. (13) インドリイェーシュヴァラ（釈天柱童子）
- II. B. 28：未比定
- II. B. 29：『ガンダ・ヴューハ』. (17) サマンタネートラ（普眼妙香長者）？
- II. B. 30～38：未比定
- II. B. 39～41：『ガンダ・ヴューハ』. (19) マハー・プラバ（大光王）
- II. B. 42：未比定
- II. B. 43～44：『ガンダ・ヴューハ』. (20) アチャラー（不動優婆夷）？
- II. B. 45～61：未比定
- II. B. 86：『ガンダ・ヴューハ』. (32) ヴァーサンティー（娑婆婆陀夜天）
- II. B. 87：『ガンダ・ヴューハ』. (39) サルヴァジャガット・ラクシャサー・プラニダーナ・ヴィーリヤプラバー（願勇光明守護衆生夜天）
- II. B. 88～89：未比定
- II. B. 92～93：未比定
- II. B. 96～98：未比定
- II. B. 67、90、91、94、95、99、100：不明（破損）

V. 第3回廊浮彫

第3回廊主壁浮彫（Ⅲ. A. 1～88面）

第3回廊の主壁にも『華嚴經入法界品』を主題にした善財童子の求道巡礼記が描写されている。しかし經典に出る話がはじめから最後まで順に刻まれているのではなく、部分だけが彫刻され、内容がわからない浮彫も多い。

弥勒菩薩は頭装飾、所持品の竜華を根拠に識別することができる。文殊師利菩薩は頭後の三日月装飾、所持品、蓮華の上の經典などを根拠に識別することができる。普賢菩薩は所持品である三顆から分かる。如来は螺髪と手印、男女は胸の部分、比丘と比丘尼は頭の部分から識別が可能であるが、ボロブドゥールの浮彫の各善知識の明確な比定は困難である。

第3回廊以後は善財童子の弥勒菩薩を訪問する普賢行願讚にあたる。第2回廊主壁128面が善財童子巡礼記の中の第51番目の弥勒菩薩の弥勒宮に到着した場面まで、第3回廊の主壁と欄楯、第4回廊欄楯の総計260面は弥勒菩薩、文殊師利菩薩、普賢菩薩の訪問、第4回廊主壁の72面を普賢行願讚で解釈するのは諸説と一致する。しかし『華嚴經入法界品』の經典の内容を見れば、弥勒菩薩が大樓閣に到着するまでが圧倒的に多く叙述されていて、それに三つの菩薩訪問の場面には各樓閣の莊嚴や菩薩の徳を列挙する文章が続き、「普賢行願讚」では62偈頌によって普賢菩薩の誓願を記述している。そのため抽象的な短文は浮彫造形表現に相応しくない。經典表現を浮彫で正確に彫刻する作業は容易ではなかったはずである。

それでも第3回廊浮彫Ⅲ. A. 6は立派な建物の階段に足を踏み入れ、善財童子がすごく喜んで弥勒菩薩の大樓閣に入ろうという場面、また、Ⅲ. A. 20と、Ⅲ. A. 60の華麗に飾られた弥勒宮などは、經典の内容と浮彫が完全に一致する重要な場面である。第4回廊欄楯浮彫Ⅳ. B. 82は蓮華を持つ普賢菩薩が右手で善財童子の頭を撫でている場面で「普賢菩薩は右手を伸ばして（中略）、善財童子の頭を撫でた」という經典内容と完全に一致する場面である。

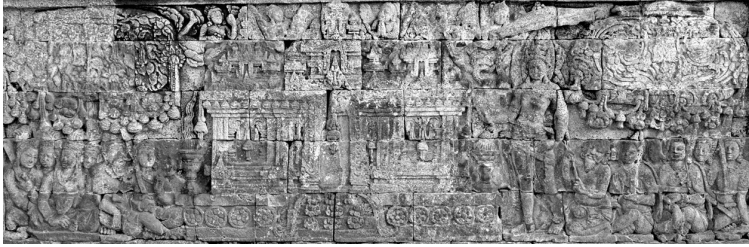


図35 華麗に飾られた弥勒宮と善財童子（Ⅲ. A. 20）

第3回廊主壁と欄楯にはそれぞれ88面の浮彫がある。これら浮彫は『華嚴經入法界品』Ⅲ. A. 39の弥勒菩薩、文殊師利菩薩、普賢菩薩を訪ねる場面が活動写真のように繰り返して刻まれている。第3回廊主壁浮彫（幅290～330cm、高さ100cm）は善財童子が弥勒宮の楼閣に入って行く場面から始まる。

第3回廊の主壁浮彫の主人公は善財童子だが、彼と一緒にしばしば登場するのが弥勒菩薩である。最初の平方は実に豪華な大楼閣（弥勒宮）が画面の中央を大きく占めている。中央に弥勒菩薩が座り、その左右に主人公の善財童子がある。善財童子が仰いで見るような豪華な聖殿（弥勒宮の楼閣）が繰り返して刻まれている。



図36 弥勒宮の中の弥勒菩薩と善財童子（Ⅲ. A. 60）

第3回廊欄楯浮彫（Ⅲ. B. 1～88面）

第3回廊の欄楯は欠損した所が多くて浮彫の比定がさらに難しい。第3回廊の欄楯浮彫の比定は不明なものや異見が多く、各浮彫と經典の対比は本稿では省略する。善財童子が弥勒菩薩とめぐり合った後、弥勒菩薩が地

獄の苦悩で人を救済する実践行の道を教わる場面である。浮彫Ⅲ. B. 1～7は弥勒菩薩と善財童子を主題にしている。善財童子が地獄、餓鬼、畜生（三悪道）に下がって弥勒菩薩が衆生を済道する光景を見る場面と解釈されている。

普賢行願讃

第4回廊主壁は旧基壇と階段ピラミッドの1番上部にあたる。従って、旧基壇と第1回廊主壁～第4回廊主壁浮彫の中で1番重要な部分が彫刻されている。第4回廊主壁浮彫は干潟が『普賢行願讃』を彫刻したという主張が定説のように思われて来た。干潟は第4回廊主壁の72面を普賢行願讃のサンスクリット語原典の字句ごとに対照させている。浮彫Ⅳ. A. 14は第46詩句の「虚空の極限がいくら遠くあることだろうか、また残っていない（すべて）衆生（数）の極限がいくら多いか、業や煩惱の果報がいくら大きいか、私の誓願がそこまで来ることを」という經典内容を造形化するために普賢菩薩の姿を地上、中空、虚空で3回表現したと解釈している。これはサンスクリット語原典や漢訳經典を精読し、少しでも浮彫と一致する記録を苦心して探した結果である。

しかし第4回廊主壁は72面の浮彫があり、普賢行願讃は62偈頌となっている。經典とボロブドゥール浮彫を詳細に比べて見ると互いに異なる箇所が多い。普賢行願讃の第5偈頌、第6偈頌、第8偈頌、第17偈頌、第18偈頌、第19偈頌、第20偈頌、第29偈頌、第50偈頌、第5偈頌の係10偈頌だけがボロブドゥールの第4回廊主壁の浮彫と符合している。

普賢行願讃は『四十華嚴』の末尾に書かれたもので、ボロブドゥール主壁浮彫經典の一つの『六十華嚴』にはない内容である。また普賢行願讃は『華嚴經』、『華嚴經入法界品』の善財童子巡礼記と内容が互いに関連がない。第4回廊主壁浮彫には中央の龕室に座っている多くの菩薩を謁見する善財童子の姿が散見される。第4回廊欄楯にも『華嚴經入法界品』によって善財童子が大乗菩薩道の普賢菩薩の行徳を行う場面がある。

第4回廊主壁の前72面の浮彫は普賢行願讃の10偈頌と符合する浮彫を除

けば、第3回廊主壁と同じく『華嚴經入法界品』を根拠としている。なぜなら、第4回廊主壁のあちこちに善財童子の姿が見えるからである。しかしこの主壁にも『華嚴經入法界品』をはじめから最後まで順に描いていない。『華嚴經入法界品』の話を一部刻んでいるので善財童子がどこで誰に会う場面なのかかわからない浮彫が多い。図像学に判別できるクベラ（大福神）と善財童子が合う浮彫はむしろ例外的な存在である。また普賢行願讃は抽象的な文句が多く、それを浮彫に具体的に表現しやすくなかったはずである。第4回廊の主壁の浮彫の比定は不明なものや異見が多く、各浮彫と經典の対比は省略する。



図37 クベラ（大福神）と善財童子（Ⅲ. B. 50）

VI. 第4回廊浮彫

第4回廊主壁浮彫（Ⅳ. A. 1～72面）

第4回廊主壁の特徴は多くの仏像の姿が刻まれているという点である。この仏像は主人公の善財童子が見た仏陀と善財童子の訪問した聖者（善知識）が神変を起こして現わした仏陀（ブツ）である。善財童子の巡礼で多様な聖者と「多くの仏陀と出会う」と言う教えがしばしば登場する。例えば第2番目の功德雲比丘については「限りない仏陀に出会う」という啓示がある。また第6番目の解脱長者も「十方の無数の仏陀を見られる」と善財童子に教えている。それに第8番目の休舎優婆夷も「十方の仏陀」の話をする。

そして第9番目の毘目多羅仙人は右手で善財童子の頭を撫でれば善財童子は三昧の状態に入って「無数の仏陀がある所にいた」と書かれている。

善現比丘、第20番目の不動優婆夷、第27番目の安住長者もやはり善財童子に「無数の仏陀を見た」と教えている。結論的に言えば「处处有仏」の世界を可視的に表現したのが第4回廊の主壁の浮彫であると思われる。このように善財童子は訪問した善知識によって多くの仏陀の姿を見ることが



図38 普賢菩薩に謁見する善財童子 (IV. A. 51)

可能であった。これは三昧を通じて見られるもので、善財童子は基本的に釈迦の境界を祈願する人であったから三昧を通じて最終的に多くの仏陀に会ったのである。

第4回廊の主壁に多くの仏像を繰り返して描いたのは善財童子の修行(菩薩行)の完成を表現したものである。その多くの仏陀を見て、仏界に入り、菩薩行は神通力によって可能となる。その神通力によって、善財童子は身体を空中に浮上させて、また空中を自由自在に飛行することができる。浮彫IV. A. 60は善財童子が幻想の弥勒宮を見る場面である。この平方は善財童子の空中浮上を描いている。この画面には善財童子が4回も描かれている。右側がまだ地面を歩いている善財童子である。その後、善財童子は蓮華に乗って飛んで空中を飛行する姿が左側に刻まれている。善財童子が地面で浮び上がりながら飛ぶ過程を活動写真のように描いている。ところが干潟博士は第4回廊主壁浮彫IV. A. 60の主人公を善財童子では



図39 弥勒宮で善財童子が空を飛ぶ場面 (IV. A. 60)

なく普賢菩薩と推定している^{〔註17〕}。

第4回廊欄楯浮彫（IV. B. 1～84面）

第1回廊から第3回廊に上がれば回廊両壁面の主壁と欄楯に浮彫がつながる。しかし第4回廊に上がればボロブドゥール主壁浮彫の重要主題である善財童子の巡礼記が主壁に刻まれるべきであるが、なぜか欄楯の壁面に連続して刻まれている。即ち、第4回廊主壁には善財童子が菩薩行を悟り、「処処有仏の仏国土の理想郷」を浮彫して、それを可視的に表現したものである。このような主壁の浮彫を強調するために第4回廊欄楯に善財童子巡礼記が再び登場するようになる。善財童子が菩薩行を悟って菩薩の境地に至ったのは善知識を探して教えを受けたからである。



図40 諸仏に謁見する善財童子（IV. B. 46）

第4回廊の欄楯は善財童子が弥勒菩薩とめぐり合う善財童子の巡礼記で始まる。第4回廊浮彫IV. B. 1～47の善財が弥勒菩薩を訪問し、「菩薩行」の教えを受ける場面である。第3回廊で略した『華嚴経入法界品』の一場面一場面を明らかにするように表現している。『華嚴経入法界品』を主題にした遺品は中国、韓国、日本に幾つかが知られているが、これら図像がボロブドゥールの浮彫に影響を与えたとは考えられない。

ジャワはもちろん東南アジアにも『華嚴経入法界品』の造形表現はボロブドゥール以外に知られていない。善財童子の巡礼記は北西インドのダーボ僧院の大日堂（11世紀）の壁画が知られている。善財童子が善知識を訪問する場面が順に描かれているが、ボロブドゥールと比べることができないくらいに画面の数が少ない。ダーボ僧院の壁画には一図多景の表現が多くある。この点はボロブドゥールの浮彫の表現方式と著しい相異点である。

例えば文殊師利菩薩の樓閣に善財童子が到着すれば文殊師利菩薩は1000柔順のあちらで手を伸ばして善財童子の頭を撫でた情景を表現するのに、雲から出た腕を4回も繰り返して描いている。ボロブドゥールでは一つの浮彫パネルに一場面だけ表現するのが基本である。もちろん一つの浮彫パネルに二つの場面（一図景）あるいは一つの浮彫パネルに三つの場面（一図三景）がまったくないわけではない。また第4回廊主壁IV. B. 60と一緒に善財童子（普賢菩薩?）を4回も繰り返した浮彫は例外的である。従って、インドのダーボ僧院壁画とボロブドゥール浮彫の類似点は認められない。



図41 文殊師利菩薩が善財童子の頭を撫でる情景（IV. B. 82）

ボロブドゥールの『華嚴經入法界品』浮彫はどのような設計の下で、どのように配置されたのだろうか。ボロブドゥールの浮彫は設計者（監督者、彫刻家）が先例の図像を模範として製作したのか、あるいは別のシナリオ（教本）によって新しく図像を考案したのか、二つのうち、一つである。ところがボロブドゥールの『華嚴經入法界品』の浮彫に先行する遺品は今まで発見されなかった。ネパールの写本や北インドのダーボ僧院壁画もボロブドゥールの図像とまったく関係がない。またボロブドゥールの旧基壇、第1～4回廊の主壁と欄楯の説話浮彫と直接関連する遺品もない。

しかしインドに仏伝図や前生譚の浮彫がまったくないわけではない。インド中部地方で紀元前2世紀の前生譚の浮彫がある。仏伝図は紀元後2世紀にマトゥラ地方とガンダーラ地方で製作され始める。紀元前1世紀のバルフト塔の欄干と紀元1世紀のサーンチー大塔に仏伝図や本生譚の浮彫が

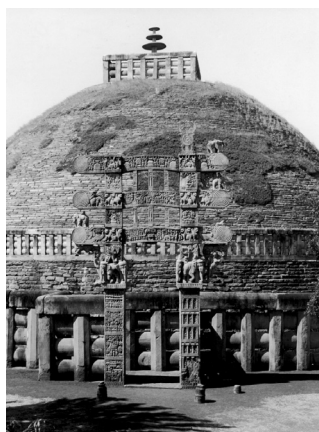


図42 サンチー大塔（東門）

刻まれている。図像の表現方法にはインドのバルフト塔の浮彫は平面的な羅列式で、サンチー大塔は立体的という様式的の違いはあるが、仏伝図や本生譚の浮彫がある。

例えばバルフト塔とサンチー大塔にはボロブドゥールと様式的に類似の仏伝図の浮彫が刻まれている。バルフト塔の仏伝図の麻耶夫人の胎夢（釈迦の孕胎）の浮彫、本生譚の鹿王ルル王の物語の浮彫、偉大な猿王の物語の浮彫がある。偉大な猿王の浮彫はサンチー大塔にも刻まれている。も

ちろんボロブドゥールは多くの場面を使って具体的で、しかも立体的に表現している点異なるが、ボロブドゥールの製作者はインドの仏教美術をよく知っていた可能性が高い。従って、インドのサンチー大塔の浮彫とボロブドゥールの仏伝図や本生譚の影響関係は否定することができない。



図43 サンチー第1塔東門の背面浮彫

特に本生譚の造形はガンダーラ地方ではまったく製作されたことがなく、マトゥラ地方だけ盛んであった。そのためボロブドゥールの本生譚の浮彫はマトゥラ地方からの影響である。

しかしボロブドゥールの第2回廊～4回廊の主壁と欄楯の浮彫はインドでその類例を捜すことができない浮彫である。従って、『華嚴経入法界品』の浮彫はインドあるいは先例の図像を参照にして製作した可能性はない。7世紀末、スリウィジャヤ王国の仏教研究が非常に高い水準にあったことは義浄の記録でよく知られている。10世紀に東インドの高僧アティシャがスマトラ島に来て修行した

くらいである。この時期仏教信仰の中心地はインドではなくインドネシアのスマトラと中部ジャワであった。そのため、ボロブドゥールの設計者はインド人ではなくインドネシア人であった可能性が高い。また、ボロブドゥールの彫刻家もインド人であったとは考えられない。7世紀のスリウィジャヤ王国は大乗仏教研究の中心地であったし、このような影響は8世紀中部ジャワに波及して、ジャワ人によってボロブドゥールは計画、設計、完成される。筆者はボロブドゥールの仏像・浮彫の配置を含む全体構成、図像の製作に至るまでジャワの僧侶が指揮したと考えている^{〔注18〕}。その根拠はボロブドゥールのような構築物はインドにはなく、仏像・浮彫も一部インド美術の影響を認めても、インドとは異なるジャワ独自の様式であることを強調しておきたい。

ボロブドゥールの『華嚴経入法界品』の浮彫の図像がインドの先例に従っていなかったことは明白な事実である。それなら彫刻家に図像を指示する教本（シナリオ）のようなものがあつた可能性が高い。その教本は浮彫の図像の特色を考慮すれば、『華嚴経入法界品』で彫刻できる特定の字句を抽出したというよりは要点のみを整理して彫刻家に分かりやすく整理したもの（メモと絵）であつたと思われる^{〔注19〕}。このような推定の根拠は旧基壇のカウイ語で刻まれたメモである。

それにその教本の作成に臨んで参照した経典は、現在伝えるサンスクリット語原典とは違う別の経典であつた可能性があると言及した肥塚隆の見解は、これから十分に検討する必要がある。ボロブドゥールの『華嚴経入法界品』浮彫を比定するためにはまずサンスクリット語原典や漢訳本を参照しなければならないが、彫刻家が必ずサンスクリット語の原典内容を字句どおり造形したと思う必要はない。また漢訳本の経典はボロブドゥール浮彫の製作とは直接関連がない。ボロブドゥールの浮彫は信者に善財童子の遍歴を視覚的に理解させるために製作されたことでそのものが一つの経典であつたと肥塚隆は指摘している^{〔注20〕}。ボロブドゥールの浮彫は誰もが分かる因果応報を教える旧基壇、第1回廊では釈迦の一代記とジャータカ、

アヴァダーナ、そして第2回廊～第4回廊では『華嚴經入法界品』に基づいて具体的に表現している^{〔注21〕}。

終わりに

ボロブドゥールは仏教遺跡であるが、インドや中国の影響によって成立したものではない。密林の中で1814年にラッフルズが見つけたボロブドゥールはその後地震と熱帯多雨林の自然条件の下で崩壊危機に直面する。このような崩壊の危機は国際協力でユネスコが修復することになる。ユネスコの復元工事が始まり、今まで知られていなかった新しい発見があった。復元以前までボロブドゥールは漠然と自然の丘の上に建てたと考えられていた。復元過程で内部の土質を調査した結果、自然の丘の上に土を積み上げて人工の大きな山を築いたことが明らかになった。東南部に並列する三つの自然の丘と西北の二つの丘を一つの大きな山の形で積み上げたことが判明した。

古代ジャワ人はボロブドゥールを建設するのに先立ってまず大きい山を積み上げる巨大な土木工事を行った。巨大な人工の山の表面に多く石材を積み上げ、階段ピラミッドを建造したのがボロブドゥールである。即ち、ボロブドゥールはインドの円球型のストゥーパとは基本的に形態が異なる構造である。紀元前5～6世紀に初めて金属器使用と水田農業を基盤としてジャワの基層文化が形成する。このような基層文化の中で1番著しい特徴は、祖先崇拜と山岳崇拜が融合して高地にピラミッド神殿（霊墓）を築造することである。ジャワ島の先史時代ピラミッド遺跡はスマトラ島、バリ島などでも発見されている^{〔注22〕}。首長の墳墓に階段ピラミッドの神殿を造り、先祖の霊が降臨する場所として崇拜した遺跡である。結論的に言えば、ボロブドゥールもこのような原始宗教を背景に展開したピラミッド神殿にインドの仏教が加えられた構築物だと言える。

シャイレンドラ王朝のボロブドゥール建立には当時の乾季に強いインディカの普及と農具の飛躍的な発展が背景にあった。しかしボロブドゥー

ル建立には単純に水田農業のみを経済的基盤としたのではなく中部ジャワ北海岸の貿易収益も看過できない。今まで中部ジャワの寺院は水田農業を経済的背景にして造られたものと認識してきたが、ジャワの北部海岸を通じる海上貿易による富の蓄積によってボロブドゥールの創建が可能であったと思われる^{〔註23〕}。スリウィジャヤ王国は海上貿易国で、シャイレンドラ王国は農業国だという単純な分類法は認めることができない。シャイレンドラ王国は農業だけではなく海上貿易を通じて莫大な富を蓄積していた。シャイレンドラ王国の活発な海上貿易活動は中部ジャワで発見された古マレー語の碑文が物語っている。当時の主要港として注目される所は中部ジャワの北海岸のペカロンアンである。ボロブドゥール創建の経済的背景にはシャイレンドラ王国の海上貿易による富の蓄積と密接な関係がある。遠洋航海用の大型帆船の浮彫と善財童子の巡礼の浮彫などもその傍証的な証拠である。

アジアの仏教遺跡の中で一番多い説話を彫刻したジャワ島のボロブドゥールは760～830年に建てられたインドネシアの世界文化遺産である。ボロブドゥールは当時中部ジャワを中心に隆盛したシャイレンドラ王朝の霊墓（それに相当する記念物）と思われる^{〔註24〕}。この聖殿に参拝する人のために全5階の壁面に多様な仏教経典から採用した話が浮彫されている。ボロブドゥールの製作当時の設計者と監督者は仏教経典に通じていたことは間違いない。しかしそれから長い年月が経ってこの浮彫パネルがどの経典の話を彫刻しているのかわからなくなった。だからこそ20世紀以後に多くの研究者がこれらの浮彫解釈に多くの努力を注いできた。

現在も浮彫の中ではどの経典を根拠として、どの話を描いたかわからない場面があり、また一部の浮彫には経典とは関係のない場面もある。このような曖昧なボロブドゥールの浮彫の解釈を巡って積極的な解釈と慎重な解釈が対立している。クロム以後の慎重論を並河が批判して積極的に浮彫を解釈している^{〔註25〕}。しかし1460面の浮彫をこの経典あの経典にむりやりに解釈することは問題がある。従って、本稿では今までの研究に基づいて

浮彫出典やその内容がある程度明白に知られた浮彫を中心に紹介した。東南アジア文化の大部分がインド文化の影響を受けたことは否定できない。しかし東南アジア美術はインド美術の一部でもなく、亜流でもない独自性を持っている。例えばボロブドゥール遺跡はインドでは見られないし、ボロブドゥールの彫像もインド彫刻の官能性が排除された東南アジアの穏やかで清楚な「青は藍より出でて藍より青し」の典型である。

- 〈注1〉千原大五郎、「仏跡ボロブドゥール、ヒンドゥー・ジャワの建築芸術」、1969年
千原大五郎、『インドネシア社寺建築史』、日本放送出版協会、1975年
- 〈注2〉並河萬里、干潟龍祥、千原大五郎、並河亮、『ボロブドゥール』、1971年
- 〈注3〉岩本裕、「Sailendra 王朝と Mataram 王国の Java 支配について」、(『西南アジア研究』、京都大学) 8、1962年
- 〈注4〉並河亮、『ボロブドゥール華嚴の世界』、講談社、1981年
- 〈注5〉伊東照司、『インドネシア美術入門』、1989年
田枝幹宏・伊東照司編著、『ボロブドゥール』、山川出版社、1998年
田枝幹宏・伊東照司編著、『ボロブドゥール遺跡めぐり』、新潮社、1997年
- 〈注6〉肥塚隆、「ボロブドゥールの説話図とテキスト浮彫の検討」(『民族芸術』vol. 3、1987年)
- 〈注7〉小川光暘、「環太平洋のピラミッド」、(『日本環太平洋文化』創刊号、1991年)
- 〈注8〉坂井隆、「インドネシアと台湾の巨石文化：34年後の『えとのす』論争」(『上智アジア学』30、2012年)
- 〈注9〉拙論、「バリ島周辺のピラミッド遺構について」、(『環太平洋文化』第4号、日本環太平洋学会、1992年)
- 〈注10〉サトヤワティ・スレインマン、「ボロブドゥールと中部ジャワ遺跡の歴史的背景」、(『インドネシア美術展』、1980年)
- 〈注11〉Levi, S., 1931, "The Karmavibhanga illustrated in the buried basement of the Barabudur", in Annual Bibliography of Indian Archaeology, IV.
- 〈注12〉Krom, N.J. and Th. van Erp, 1927, Borobudur; Archaeological

Description. Two Volumes. The Hague: M. Nijhoff

- 〈注13〉 干潟龍祥、『ジャータカ概観』鈴木学術財団パドマ叢書、1961年
- 〈注14〉 Fontein Jan, 1966, The Pilgrimage of Sudhana. The Hague: Mouton.
- 〈注15〉 Fontein, J., R. Soekmono, Satyawati Suleiman : Ancient Indonesian Art, New York, 1971
- 〈注16〉 肥塚隆、前掲書
- 〈注17〉 干潟龍祥、「ボロブドゥールの浮彫りと仏典」（『ボロブドゥールの宗教美術と保存』、共同通信社、1981年）
- 〈注18〉 拙論、「東南アジアの寺院と彫像」、(『季刊韓国の考古学』第18号、2011年)
- 〈注19〉 肥塚隆、「インドネシアの彫刻」、(『東南アジア』、小学館、2001年)
- 〈注20〉 肥塚隆、「ボロブドゥールの説話図とテキスト浮彫の検討」、前掲書
- 〈注21〉 梶山雄一（監修）、『さとりにへの遍歴、華嚴経入法界品』上、下、1994年を主に参照した。
- 〈注22〉 拙著、『ジャワ島の寺院と遺跡』、周留城出版社、2012年
- 〈注23〉 拙著、『燦爛たる仏教遺跡ボロブドゥール』、Book Korea、2013年
- 〈注24〉 拙論、「インドネシアの世界文化遺産ボロブドゥール」（『環太平洋文化』第31号、2016年）
- 〈注25〉 並河亮、前掲書